

平成27年度第2回 芦屋市立美術博物館協議会 会議録

日 時	平成28年2月22日（月）14:00～16:00
場 所	北館2階 第3会議室
出席者	<p>会 長 蓑 豊 委 員 池浦 隆一 委 員 岸野 裕人 委 員 仲庭 太栄子 委 員 成田 直美 委 員 別所 健 （欠席委員） 副会長 齊木 崇人 委 員 野村 知巨</p> <p>（芦屋市立美術博物館指定管理者） 副館長 石井 茂（株式会社小学館集英社プロダクション） 学芸員 大槻 晃実（株式会社小学館集英社プロダクション） 株式会社小学館集英社プロダクション 上野 健治 株式会社小学館集英社プロダクション 中村 匡一 グローバルコミュニティ株式会社 青木 大介</p> <p>（事務局） 生涯学習課長 長岡 一美 生涯学習課文化財係長 竹村 忠洋</p>
事 務 局	生涯学習課
会議の公開	■ 公開
傍聴者数	0 人

1 会議次第

2 議題・報告

(1) 開会

(2) 議題・報告

①「芦屋市立美術博物館運営基本方針」等と事業等の検証について

②その他

3 提出資料

資料1 芦屋市立美術博物館運営基本方針

- 資料2 芦屋市立美術博物館運営基本方針に対応するこれまでの取り組み・事業について
- 資料3 美術博物館協議会における委員からの主な意見とそれに対応する具体的な取り組み・事業について
- 資料4 事務報告抜粋（平成23～26年度）

4 審議経過

（菘会長）

議題1の「『芦屋市立美術博物館運営基本方針』等と事業等の検証」について、事務局より説明をお願いします。

（事務局：竹村）

<資料1～3を用いて説明>

（菘会長）

ありがとうございました。阪神間モダニズム調査隊ボランティア養成講座は、何人ぐらい参加されましたか？

（石井副館長）

20人前後だと思います。学術的な調査の方法を学び、実際に地域を調査し、本にまとめられました。

（菘会長）

わかりました。それでは、さきほどの説明で何か質問、意見等ございますか。

（池浦委員）

前回、第三者評価で評価が良くなかったことを追い風にしていったらどうかという話になりました。その流れで、今日、会長が市長と会って話をされましたが、今後、芦屋市が本気で美術博物館を何とかしようっていうふうになるのか、私にはまだ疑問です。私はまだ3回しかこの協議会に出席していませんが、「言いつばなし」、「聞きつばなし」になっています。実は、最初に運営基本方針をさらっと読んだ時にはもっともらしく読めました。ところが、今回改めてきっちり読むと、使命、目標、役割などは書いてあるけれども、非常に画一的に書いてあって、そのまま他市でも通用する非常に総花的で、無個性なものになっており、芦屋というものがまったく感じられません。内容に脈絡や具体性が全然出てきません。一番肝心の「芦屋市立美術博物館の使命・目的」も、確か「文化遺産の継承」や「学習機会の提供」、「子どもへの教育」などがたくさん書いてありますが、使命と目的がいくつもあるのはおかしいと思います。例えば、「文化遺産の継承」が要だとすれば、(2)、(3)、(4)に書かれている使命・目的は継承していく行為を並べているだけで、これらを並列することはおかしいと感じます。そして、この基本方針は作りつばなしになっていて、達成状況については1回も検証してこなかったのではないのでしょうか。今後の課題も、基本方針を作ってから何年も経っているのに解決していません。さらに新たな課題もまるっきり書かれていません

今日の会長と市長の懇談は一つのきっかけだと思いますが、本気で何かやるのだったら、運営基

本方針もやり直してみてもどうかと思います。現在の美術館の運営は、第三者評価でも酷評されているのが現実です。美術館博物館がちゃんと運営されていて、今良い結果になっているのなら、年に1回か2回協議会をやっていけば良いけれども、芦屋市としてこんな状態のままよく放っておく、というのが率直な感想です。

(養会長)

ありがとうございます。今日、市長と懇談することができたのは、第一歩だと思っています。皆さんの意見を踏まえて、市長にはメッセージを伝えました。この3年の入館者数をみると、ふつうは上がってほしいのですけれども結果が出ていないのは、我々の意見が反映されていないんじゃないかと、すごく感じました。次の協議会では何かの形で出てくれば良いという思いがあります。やっぱり美術館は、人が来てなんぼの世界だと思います。結果が出ないとやっぱり理解されません。こんなにお金を使っているのに何の結果も出てないと、「こんな無駄なお金で何やってんだ」と言われると思いますので、きちっとした目標を持って前へ進んでほしいと思います。例えば谷川俊太郎さんを呼ぶと人もやっぱり来てると思うし、昔、奈良美智さんの展覧会をやった時もグッズがたくさん売れて全国のニュースにもなりました。もちろん具体美術もすごく大事ですけれども、今活躍しているアーティストと具体を交互にやれば、新しい観客、若い人がついてくると思います。学芸員も少ない人数ですから大変だと思いますが、他館の学芸どうしで助け合えばまた企画でも新しくできると思うので、もっと連携してやることも大事です。先ほども市長と話をして、芦屋はすごく良いブランドを持っているわけだから、魅力のあるまちになれば、もっと人も来るわけで、やっぱり美術博物館はすごく大事だと思います。前向きに一つ一つ取り組んで、結果を出すように努力してほしいと思います。

(別所委員)

私はPTAの代表で来ているので、教育という視点で美術博物館の使命と目的を考えてみたんですけども、他市の美術館の方とお話する機会がありましたが、小学4年生、10歳の年齢が非常に感性が豊かで、10歳までにアートにどれだけ触れてるかというのがポイントだと仰っていました。例えばゴッホの絵を見せて、12歳の子に色々意見を言わせると、大人っぽい意見が返ってくるらしいんですけども、10歳の子は「ゴッホはこう書いたけど、私だったらこう書くんだけど」というふうに答えのない世界にどんどん発展させていくらしいんです。芦屋市も10歳で2分の1成人式がありますが、まずはアートの世界で10年、20年かけて、市民に根付かさないといけないと思います。運営基本方針の使命と目的も、もう少しシンプルなフレーズで例えば「市民と共に生きる」、美術博物館は市民と共に生きるんだ、というような単純なフレーズであったとしたら、そこからどんどん議論が発展していくのではないのでしょうか。PTAの立場で具体的に出来ることは、PTAの総会など会議があるんですけども、教育関連で色んなネットワークを持っているので、そこにどんどん美術博物館の方も来られて発信していくこともスタートできるのではないかと思います。それと、芦屋市としての個性がないんじゃないかっていうことですが、「具体」はやっぱり芦屋の特徴なのかなと思います。おそらく子どもに「具体」の作品を見せても何が何だか分からないと思うんですけども、分からないものが面白いんだっていうことを、もし4年生の先生がレクチャーしてくださったら違う感性で子どもたちは「具体」を捉えるんじゃないかと思います。そういう子どもたちが10年後、20歳になって成人していく時に芦屋市民として「自分は10歳の時

に「具体」を学んだな」とか、そういうものが記憶となって残ると、やっぱり市民と共に生きていく美術博物館というのが根付いてくるんじゃないかと思いますので、まずは美術博物館としての使命と目的を複雑に考えてしまうのではなくて、何のために存在しているんだろうかっていう原点に戻って単純なフレーズで思考していくと、お金をかけずにできることがたくさんあるんじゃないかという気がしています。それと、基本方針には友の会について書かれています。例えば海外もメトロポリタンやルーブルでは、3分の1は市民の寄付で美術館が成り立っていると思います。やっぱり芦屋は富裕層の方がたくさん住んでいらっしゃるまちですので、例えば友の会に協賛していただく方を公募して、実際にメトロなんかでやっているのは100万円以上、10,000ドル以上の寄付をしてくれた人が館長とディナー、館長からディナーの招待券がきて、色んな情報なんかをもらって美術の話をするっていうユニークな活動も行われていますが、そのようなことができる文化の土壌が芦屋市にはあるんじゃないかなって気がします。まずは教育という視点で考えた時には、10年ぐらいのスパンで子どもに教育、「具体」を中心とした芦屋の特徴で、まずアートの教育をしていく、やっぱり美術館というのは今までは管理・保存であったり、調査・研究・展示っていうのがテーマだったんですけれども、近年は教育を普及させていくことが大きな美術館の役割ではなかろうかと思っていて、そういう点で美術、歴史、音楽をコラボで色んなイベントを企画していくと、市民に根付く美術博物館になるんじゃないかという気がしています。

(養会長)

私も同感です。日本の美術館は教育施設としてできているんですけども、どうしても博覧会場なんです。物を見せる場所が美術館ということで、戦後になってやっと美術館を教育施設として使えるようになったと思いますが、まだ学校の先生もあんまり分かっていません。色んな勉強で美術博物館を利用するようなくみを芦屋市から始めてほしいです。ただ美術品を見るためのあまりにも狭い意味で美術館が考えられていますけれども、美術品を通してその国の歴史、文化を理解し、物を見ながら歴史を教えた方が子どもにとってもすごく興味をもつ。たまたま芦屋市の美術博物館は図書館と一緒にあるわけですから、そういうことも踏まえて色んなことで美術館、博物館を利用すれば子どもたちも非常に親しみを感じるし、大人になってからぶらっと美術博物館へ行ってみようという気持ちになると思うので、ぜひ、子どもたちに教えてあげたいです。市の内部で連携すれば、子どもたちを美術博物館に連れていくことができるはずですから、子どもたちにとって美術博物館がもっと近くなってほしいと思います。美術館博物館にどうしたら子どもたちが行って学べるんだろうっていうことを真剣にやってほしいです。そうすることによって美術博物館の人たちも一生懸命何とかするという気持ちになると思います。

(池浦委員)

運営基本方針には、良いことも書いてあります。例えば、「使命・目的」の中の(3)に、「知の拠点となることを目指す」と書かれています。「歴史部門の方針」では、「郷土の歴史文化を正しく知ることは、市民のアイデンティティを形成し、芦屋市民としての誇りを醸成することに繋がる。」と書いてあります。美術博物館の使命と目的って本当は何なのか。もっとシンプルで良いと思います。例えば全国の知名度で、芦屋といたら何なのか、おしゃれとか、お金持ちとか、そういうふうです。これらはかなり間違っていることだと思いますが、芦屋の知名度を上げているのは近代史になると思います。芦屋が住宅地として発展してくる時に、最初にもものすごい有産階級の人たちが

入ってきますが、そういう人たちだけでなく、色んな人が集まってくるのですが、そこで醸成された文化というのが「阪神間モダニズム」と言われています。だから、芦屋の貴重な文化遺産が何か、と言った場合に、例えば、会下山遺跡も『伊勢物語』もありますが、やっぱり全国ブランドになっているのは芦屋の近代史であり、その部分をはっきり言ったら良いと思います。それから、芦屋を世界ブランドにしているのは、やっぱり「具体」です。

どうやったら美博に人が集まるのか、そういう時には強みを使う必要があります。「具体」だけやれば良いって言うわけではないですが、強みをどうやって発揮していくのかということ、目的を達するためにどうやってしていくのかということがついてきます。だから、たくさん人が集まるために今どうするかっていうことは、いくらでも工夫できるわけだし、アイデアとしていっぱい色んなことが出てくると思います。一番の根っこはやっぱり美術博物館が何のためにあるのかということで、芦屋市としてきちっと考えてほしいです。我々だって色々とアイデアは提供します。美博を本当に知の拠点にしてはどうでしょうか。

美術博物館が指定管理者になった経緯は、全国の美術館でも有名で関心もたれています。ある意味ですごく注目度が高いんです。それが第三者評価で酷評され、非常に残念だと感じました。それと、白髪一雄さんの絵画のセミナーが公民館であり、今修復しているということですが、これに美術博物館がどのように関わっているのか、これは本当の専門ではあるはずだと思いますが、どうなっているのでしょうか。公民館の講座のパンフレットを見ると、講義のテーマとかいっぱいあり、その中には阪神間モダニズムや今の白髪さんのものがあります。本当に知の拠点になるんだったら、強烈に絡みそうなものっていうか、主役は美術博物館であつても良いんじゃないかと思いますが、本当の意味での連携が一体どうなっているのでしょうか。主催はすべて芦屋市ということで、割と小さい芦屋市の中に、市立の美術館も博物館も公民館もあつて、谷崎潤一郎記念館、富田碎花旧居もあつて、色んなことをやっているが、それらが美術博物館とどのようにつながっているのか、まるっきりバラバラにしているのではないのでしょうか。

それから神戸市の住吉の辺りが近代で言えば芦屋よりも一歩先に開発されていますが、近世から近代の歴史がすごくきっちり調べてられています。そういうことを芦屋市としてもきちっと連携をとり、そういうところと上手くタイアップして、あるいは美術博物館さえしっかりしていれば、そういうことがもっときっちりできると思います。その辺が芦屋市の本気さを感じられないということに繋がっています。

(藁会長)

今意見の中で、白髪さんの絵が芦屋市立公民館にあり、今回の修復には美術博物館の学芸員も関わって、それから白髪さんの生まれた尼崎市総合文化センターの学芸員も一緒に入っています。修復の完成を祝いセミナーをするのはすごく良いですし、美術博物館の学芸員が関わっているわけですから素晴らしいことだと思います。ぜひ、たくさん人が行って、市民センターが有名になるのではないかと思いますので、こういうことはぜひやってもらいたいですし、同時に美術博物館でも白髪さんの作品を少し出して、市民センターへ来たら帰りに美術博物館に寄れるような仕組みをつくれれば、また来館者も増えてくると思います。こういうチャンスは、ただ市民センターでやって終わりではなくて、せっかくみなさん芦屋まで来ているのですから、美術博物館にも寄ってもっと白髪さんの絵を見たいという、そういうことも考えてほしいです。これまでの意見を受けて、ぜひ真剣に芦屋市としても聞いていただいで、美術博物館にたくさん人が入って市民の方々もこれを

継続できるようになることが大事だと思うので、よろしくお願いします。

(岸野委員)

こうやって聞いていてやっぱり思うのは人材です。それと予算、それらがまず背景にあって、それを確保した上でやるべきこともたくさんありますが、逆に言えばそれらがなくてもできることもたくさんある。運営基本方針に書いてあることがたくさんありすぎて、これを全部まとめてやったらとてもじゃないけど身体も金もちません。やはり絞って一つのポイントを作って、それでアピールするべきではないかと思います。一つ気になるのは友の会やボランティアという組織を作るのはいつ頃から計画されて、現在どのような状況にあるのでしょうか。本当にやるつもりでしょうか。友の会やボランティアは確かに非常に強力な助っ人になりますけれども、その組織のさまざまな運営を維持していく上ではやっぱり人は必要、人材が必要であり、また、それを偉そうに言うようですが教育していかなければなりません。一緒に盛り立てていく立場の美術館側の担当者も必要です。たくさん経験それから周辺の理解がないと成り立ちません。アメリカのような寄付で運営していくにはなかなか時間もかかるし困難なことも多いと思います。姫路市を例にとりましたら、友の会は発足当時、開館した当時景気も良かったこともあって1980年代中頃、会員数は1,000人を超えていました。企業をはじめとする協力者、賛助会員は1口50,000円、50組くらい入ってくださっていて、それは市長であったり、財界の援助をしてくださる方々の助力があつてこそなんですが財政的にも潤っていました。また、友の会は営利団体ではないので収益が上がればそれを美術館に作品を寄贈するかたちで還元してきました。いくつかの作品が収蔵されます。そういう時代には友の会の存在は非常に大きかったんですが、現在は会員数が半減しまして、運営自体も苦しくなっている。そういうことも踏まえて、友の会やボランティアをもし立ち上げるのならばしっかりと腰を据えてやっていただきたいと思います。うまくいけば非常に強力な助っ人です。

(藁会長)

友の会は、今何人くらいいますか。

(石井副館長)

いえ、今は友の会はありません。

(藁会長)

作っていないのですか。

(石井副館長)

はい。

(藁会長)

ボランティアもないのですか。

(石井副館長)

ボランティア組織はありまして、10人くらい登録されています。

(池浦委員)

今後の課題にこれも入っていますが、結局何にもできていないということです。世田谷区の美術館では、友の会の会員は500人ぐらいですが、結構ヘビーユーザーです。その人たちが何をやっているかという、世田谷区の小学校は4年生全員が美術館を訪れます。その時のガイドをそのボランティアに頼みます。そうすると、学芸員が小学生全員の面倒を見るわけにはいかないのだけれども、企画展の説明はボランティアの人たちが全部やっています。世田谷区の美術館では開館以来続いています。そういうふうなことは、美術博物館のやり方さえちゃんとあれば、根っこさえあれば、使命・目的じゃないけれども、そここのところをはっきりしているようなベースがあれば、後は具体的なアイデアは他にもいっぱいあるわけだから、いくらでもできるんじゃないかと思います。

(藁会長)

兵庫県立美術館では、友の会は大変大きな会だし、ボランティアも本当に毎年、何百人とすごい応募です。その中で我々厳選して選びますが、そういう人たちが責任を持って色々な部署でボランティア活動をされます。それを楽しみに美術館に来られます。芦屋市だったらたくさんそういう人が住んでいるので、もっと早く友の会からボランティアを正式に呼べるようにしてほしいです。お金もかかります。外国でいうと、シカゴの場合、10万人、12万人ぐらいいます。友の会を扱うにはスタッフもいるし、それから変な話ですが一人友の会に入ると、お金も減るわけです。特に通信費、切手代とか、そういうのがなかなかペイできないですけれども、それも応援だと思って、美術館のみなさん頑張って増やしていますけれども、そのお金も大変かかるのは分かるので、なかなかやり出したら、これもお金の問題です。2,000円、3,000円ぐらいだと思いますが、色々な通信費がいるし、色々なニューズレターも出さなきゃいけないです。だけど、応援団ってわけだから、いずれは返ってくるお金だと思うので、そういうお金は市の方でも少しは援助できれば、これはぜひ進めていってほしいと思います。

(大槻学芸員)

友の会はすごくいい活動だと思っていますが、現在のスタッフの人数では対応できないのが現状です。友の会を立ち上げ、継続させていけるのかをじっくり検討し、進めていかないといけないと思っています。

(藁会長)

今の美術博物館では、スタッフは少ないと思います。

(大槻学芸員)

スタッフが少ない中、何ができるかを考えています。平成26年度より教育普及事業の「びはくルーム」を実施しており、現代美術家を招いてワークショップやフィールドワーク、座談会、アートトーク等を開催しています。活動に参加してくださった方にはスタンプカードをお渡しし、1イベントにスタンプ1個を押印していて、一定の数を集めた方には素敵なプレゼントをお渡ししています。来年度もびはくルームを実施予定で、年間のスケジュールをたてています。中には何度も参加して下さっている方もいて、美術博物館に定期的に足を運んでいただくきっかけの一つになっ

ていると思います。リピーターをどうやって増やしていくかを考えています。これまで美術博物館に友の会がないということの理由を考えながら、真摯に検討していきたいと思っています。

当館にはボランティアの方が毎週水曜日に監視と解説の活動をおこなってくださっています。美術博物館を好きでいてくれて、館の活動にとっても協力してくださっており、美術博物館の財産だと思っています。

(岸野委員)

監視をボランティアにするのはどうでしょうか。

(大槻学芸員)

監視と受付はスタッフを雇い行っています。

(石井副館長)

スタッフは配置していますので、ボランティアには来館者の対応として来ていただいています。

(岸野委員)

ボランティアと友の会の関係にも配慮が必要です。ボランティアや友の会の会員は一般の来館者と違って、美術館にとってはコアな利用者ですから、その存在の大切さは自覚しなくてはなりません。

(藁会長)

問題は友の会だと会費が要りますが、ボランティアは会費がありません。そうするとボランティアは無料で美術館に入館でき、友の会の会員にはあんまり気持ちよく思わない人もいるかもしれません。自分達も会費を払って無料券をもらいますが、ボランティアの人は会費を払わずに入館できます。その代わりに美術館のために働いているわけですから、そのことを理解してくれば良いんですけど、なかなかその二つが上手くいかない現実があります。

(池浦委員)

世田谷区的美術館では、友の会の会員がボランティアをやっています。

(藁会長)

そうなれば問題ないですけど、県立美術館では別々です。

(池浦委員)

やっぱり美術館は、ヘビーユーザーをきちっと確保できるかどうかというのが魅力に繋がると思います。

(藁会長)

そうです。美術館にはそういう応援団が必要だと思います。お金はかかるかもわからないけれども、ぜひ、これは前向きに市の方も考えてもらわないといけません。美術博物館の入館者を増やす

大きな要因になると思います。ぜひ、これは前向きに考えてほしいと思います。

(大槻学芸員)

今年度、当館のミュージアムショップを改装するため準備を進めています。3月中にはリニューアルして新しい形のミュージアムショップをお披露目できると思います。

(藁会長)

そこに利益が出るわけだから、ミュージアムショップでたくさんみなさんが買いますので、頑張ってください。

(石井副館長)

利益ということより、ミュージアムショップに楽しみに来ていただけるようにと思っています。建物の構造上、スペースがあまりとれないのですが。

(仲庭委員)

ミュージアムショップというにも小規模で、ちょっとショップとは言えません。

(石井副館長)

それであのスペースで、展覧会でホールの方に移動できるようなことを検討していて、費用をかけ3月中にリニューアルする予定です。確かにスペース上たくさんの種類の物をあまり置けないのですが、並べている商品は買ってもらっています。

(仲庭委員)

もう少し体裁を整えたらどうかと思います。

(藁会長)

真似じゃなくて特徴を出せばいいです。例えば横尾忠則現代美術館は、売り上げがすごいです。横尾さんのデザインのジャケット等が置いてあるので、珍しいし買っていきます。そういうのを芦屋も特徴のあるショップにしたらみんな来ると思います。

(大槻学芸員)

商品の内容も変えようと考えています。

(藁会長)

もう思いっきり何か他にない珍しい物を売れば、やっぱりみなさん探しています。テレビに出ればすごいです。

(大槻学芸員)

ミュージアムショップを目当てに来てもらえるような形にできればと思います。

(養会長)

やっぱり芦屋というブランドがあるわけだから、カッコいいという何か物を置けば来ますよ。絶対あたりますよ。

(大槻学芸員)

スタッフどうしてどういったグッズを置いたらいいのか考えています。

(仲庭委員)

楽しみです。

(別所委員)

あと一つ、10年ぐらいの計画で、例えば小学校で「美術館で何するところなんだろうか」や、「行ったことあるか」、「何してほしい」などについて、小学生に話し合いをさせてみると、いっぱいヒントが出るのではないかという気がします。それを例えばPTAを使って集約して、意見交換するのもお金がかからずに良いし、先生の啓発にもなるんじゃないかと思います。それと、各小学校に学芸員が出張して、美術館について朝の職員会議でお話するとかっていうこともお金がかからないやり方じゃないかと思います。例えば夏休みのワークで、ワークショップで小学生対を象にした、「学芸員と一緒に夏休みの作品作りませんか」みたいなイベントを実施があったり等、市民と共に生きていくという視点で色々企画を考えると面白いかなと考えました。

(養会長)

金沢21世紀美術館がオープンする前ですけれども、本物の作品を学校に持っていきました。子どもたちは目が違うから、スライドで説明するよりも良かったです。実際には保険とか色々問題がありました。外国だとバスに本を積んで色んな田舎の方の学校へ、そういうツアーがあります。出前出張みたいな。それも思いっきり作品を持って行って学校で、体育館で良いんですよ。それで学芸員がその作品について、みんなにどう思うか、学芸員がすぐしゃべるんじゃなくて、子どもたちから意見を聞く。色んな意見が出るんで、そうするとみんな興味を持ってきます。「具体」の作品を思いっきり持って行ってね、小さくても良いんですよ。作品を持って子どもたちに本物を見せながらやると全然違うと思います。そして、美術館に行った時になんか自分のスターが、自分の学校で見た作品が美術館に展示されていたら全然違いますよ。そういう子どもたちが感動するようなことをやってほしいと思います。言い出したら色んな方法があるので、ぜひ、それは一つずつやっていただきたいです。

(岸野委員)

現在の基金の残高がかなり低い、財産としてはあるのですけれども、その補填は今後あるのでしょうか。現金がある程度ないとコレクションはできないと思います。また、例えば現代美術の世界においても芦屋にとって重要な作家、若手も出てきていると思うので、そういう作家の支援を含めて収集する。またその作品を学校に持って行ったり、そこに作家が関わるなど、作家を身近に感じながら現代美術への興味を促す。そういう刺激的な展開も考えられる。財政上の問題があるのは承知の上でお尋ねするのですが、ある程度の努力で少しでも良いから基金の積立をしていけば美術博

物館の活力が生まれると思います。

(養会長)

すごく大事なことで、日本の美術館はできる前はすごい予算があつて作品を買うんですけども、建物ができてしまうと購入基金がなくなってしまう。美術館は安くてもいいから毎年新しい作品を入手していかないとそのギャップは絶対に埋まりません。その時代時代っていうのはすごく美術博物館にとって大事なことなので、予算がないから何も買わなかったりすると後ですごく影響が出ます。コレクションも一緒です。予算がないから買わないって言うんじゃないで、何とか寄付をもらってでもいいから、毎年何でもいいから買っていくっていう仕組みをつくってほしいです。

(池浦委員)

日本でも最近アーカイブズについて取り上げられていますが、やはりヨーロッパやアメリカのような本当の意味でのアーカイブズというのはまだなかなか整備されていないと感じています。芦屋のブランドの話になると、特に芸術作品も含めて、あるいは近代史の色々な歴史的なシーンを含めて、やっぱりこの美術博物館にそれらのアーカイブズを導入してやったらいいと思うのですが、いかがでしょうか。

(養会長)

それはすごく大事なことで、特にアメリカの場合もそうですけれども、やっぱりそのギャップっていうのをどうして埋めていくっていうのは、どんなことがあっても寄付は集まりますから、国がそうですから。例えば東京国立博物館は資料室なんか立派な建物を作っているけれども、予算ゼロなんです。今言ったアーカイブズです。それこそが本当のアーカイブズで、やっぱり将来日本の歴史を勉強する上で、日本の国立博物館にそろってないっていうこと自体おかしいので、もちろんだから芦屋市がやれって言ったってそれは大変なことだと思いますけど、声を出せば必ず喜んで寄付する人は出てくると思います。それしか多分、芦屋市が予算をとすることは無理だと思うんだけど、せっかくみんなの美術博物館ですから絶対に寄付する方は増えてくると思うので、それもやってほしいなと思います。他に何かありますか。

(成田委員)

コミスクの立場でご協力できることを申し上げますと、広報という面から考えますとコミスクは各小学校区すべてを網羅しています。例えば、私の所属する山手コミスクでは、年に2回ですけれども5,300世帯くらいに広報誌を配布しています。他の各コミスクも何千世帯に広報誌を年に2回発行していますので、何かイベントやボランティアの募集一つにしても、言っていただければ広報誌の中に組み入れるご協力ぐらいはできると思いますので、お知らせいただけたらと思います。それともう一点、市民目線で言いますと、前回、例えばアクセスのお話にしても全然進んでいないという話について私も本当にとっても残念に思っているのですが、具体的に車で行くにしても看板がすごく分かりづらくて通り過ぎてしまう。そしたら、もう少し分かりやすい看板、私が思うには、色を変えるのも一つかもしれないですけども、例えば美術館らしい筆の看板にするとか、パレットの形にするとかそういった物でも良いですし、バスにしても美術博物館前っていうバス停があれば「美博があるんだな」っていう市民の意識も高まると思います。市街地の北部の市民にとっては、

意外と直線で近いようでも、バスで行くと片道 440 円かかります。同じ芦屋にあるのに西宮市の大谷記念美術館に行く方が安く、何か微妙な感じで、そういうところも少し年配の方には遠のくのかになっていう思いもしますので、何とかならないかと思えます。それともう一つが以前指定管理になってすぐの時に美術博物館で結婚式を企画運営させていただいたんです。そういうご協力もできたし、結婚式の会場に良いのか悪いのかは難しいところであるかもしれませんが、そういうふうな市民目線にさせていただくと芦屋市の方だけではなく、市外の方にも何か入りやすく見ていただけるのかなと思えますので、ぜひ、そういう取り組みもしていただけたら、また私達が企画運営したいなと思えます。もう一つは芦屋はパンとケーキがとってもおいしい街で、私の友人には市外の遠くからでも買いに来られる方もたくさんいるので、お庭とホールを使って、もしパンとケーキの芦屋のショップに集まっていただいて、そういったことができれば邪道かもしれないですけども、人が集まって美博を知っていただける機会にもなると思えますので、ぜひ、ご検討いただければと思います。

(会長)

お客が増えています。ぜひ、使わせてもらってお願いします。次、「その他」について、何かございますか。

(池浦委員)

今日の話も「言いつばなし」にならないようにしていただきたく思います。

(会長)

何が一番してほしいですか。

(池浦委員)

さっきから何度も申し上げているように、使命と目的だけでもシンプルにきちんと出してほしいです。それに対してもちろんいくらでも意見は申し上げます。芦屋市として出すべきだというのが、私が申し上げたいことです。

(会長)

ぜひ、次回には何かの答えが出ればいいと思えます。今日は本当にたくさん意見が出たので、これを全部やるっていうのは大変ですけど、少しでもやっていただけると、また、前向きにみなさん意見を出してくれると思えますのでよろしくお願いします。

(事務局：長岡)

最後に確認ですが、本日、各委員から色々なご意見をいただきましたが、特に「美術博物館運営基本方針」について、使命・目的を絞り込んで何を 1 番目指すかというところについて、もう 1 回考え直すというか、美術博物館協議会の意見、総意として考え直すべきではないかというご意見をいただいたということで、進めていくことでよろしいでしょうか。

(会長)

私は、ぜひ、一つでも二つでも運営基本方針に書いてあることを実行していただければ、また前に進むと思うので、ぜひ、やってほしいと思います。1番をあげたら、どれが重要でしょうか。

(池浦委員)

一つでも二つでも進めるためには、最低、少なくとも美術館、博物館の使命・目的をはっきりすることをおさえないと、そこから後の話は全部とってつけた話になりそうな感じがすることを申し上げました。その上で1個でも2個でも、本当に会長が仰るみたいに前に進んで行ってほしいと我々は思うのです。

(養会長)

だから一番大事なのは単純明快です。シンプルで良いんです。あんまり難しく考えないで、もうみなさん一番知っている訳ですから、やっぱり一番大事なのは何人入館するかです。やっぱり入ればみなさん納得いくと思うので、今の数字だったら誰も納得できません。日本全国で平均5,6万人です。それよりもっと下にあるわけですから、それに近い数字に上るにはどうしたらいいか、今我々が出している意見を少しでも実現すれば絶対増えていくと思うので、ぜひ、やってほしいと思います。もちろん企画展というのはすごく大事なんだけど、3人の学芸員でやるのは至難の業でしょうけれども、ぜひ、みんな、他の美術館も助けるわけですから、目標に向かってやってほしいと思います。よろしいですか。もしなければこれで議事は終わらせて頂きます。ありがとうございました。

<閉会>